「第 6 回技術士の集い」概要報告

主催：日本原子力学会　教育委員会　技術者教育小委員会
共催：日本技術士会　原子力・放射線部会
日時：2013 年 3 月 27 日（水）　12：00～13：00
場所：近畿大学 21 号館 21-320（日本原子力学会春の年会H会場）
配布資料：
① 「3.11 以降の原子力･放射線部会の活動」
② 「関西地区での活動状況報告」

林氏（日立）の司会により第 6 回目となる技術士の集いが開催され、今回は全体の部会活動紹介とともに関西地区の技術士の活動状況の紹介及び、東京地区と北関東地区、関西地区との連携等を話題に情報交換が行われた。参加者は 19 名であった。

１．主催者挨拶：　工藤和彦教授（九大）

原子力学会の教育委員会のメンバーとして長らく技術士の試験制度に参画してきた。昨年は合格者（率）が少なく若干心配しているが、学会全体としては原子力技術者の人材育成や技術研鑽に対する認識が高まってきている。先程の他のセッションでも、深層防護の 1～3 層は主にハード対応であるが、その後の 4 層、5 層は技術者の技術的能力やマネージメントで対応することの重要性が強調されていた。如何に個人、技術士、組織としてこれらを高めていくか、私もできるだけ協力したいと考えている。

先の原子力委員会の見解の中でも「技術士」への期待が述べられていた。今後技術士の役割が増すので、是非夫々研鑽を図っていただきたい。

２．報告

（1）学会と技術士会の連携活動について：　桑江良明　部会長（電源開発）

配布資料①に沿って講演

技術士の原点は、社会から信頼される技術者であると考えており、その存在価値を示すため、福島第一事故以降部会として何をなすべきかを話し合ってきた。そして結果的に現場で被災者に直接寄り添って行う活動を実施してきた。その例として避難住民の一時帰宅支援業務への参加、福島コールセンター支援業務への参加、事故・放射線等解説チームを作り地元住民に対する相談等を行ってきたことが写真を基に紹介された。また、

都内での避難者交流会・相談会に定期的に参加した他、国、県が立ち上げた「除染情報プラザ」に専門家登録し継続的な活動を行っている（80 名のうち 20 名が技術士）こと、この他にも他学協会と連携し社会人向け「知の広場」において、中立的な立場から部会として原子力発電の仕組みや原子力安全、放射線の講義を行ったこと、他部会と連携して CPD 教材「福島事故についてともに考える」を作成し好評を得たが、一方で原子力技術者に対する厳しい指摘もあったことが紹介された。人材育成面については原子力学会と連携し学会主催の「技術士制度･試験講習会」に協力して、技術士合格者の増員に努めている。

上記活動を振り返ったうえで、学会と技術士会両者の特徴を活かした今後の連携の在り

方について改めて問題提起がなされた。

（２）関西地区での活動状況報告：　的場一洋　氏（三菱重工）

配布資料②に沿って講演

的場氏は、H18 年に技術士試験に合格し、H19 年には地域の京都技術士会にも入会して、それ以来子供たちへの理科教育支援のための講師として活躍されている。京都技術士会は各分野の技術士 187 名から構成されており、月一回の例会での技術発表を中心として、子供たちへの理科支援や定期的な見学会等の活動を行っている。

例会では、原子力発電の仕組みや今後の発展（原子力ルネッサンス）について発表してきたが、その矢先に福島事故後発生したことを残念に思っている。子供たちの理科教室においては、如何に子供たちの興味を引くかが大事であるため、身近で簡単に行える実験（体験）主体の内容として、理科の楽しさ、科学への興味や関心を持ってもらうようにしているとの事である。例としてポテトチップの空き箱を利用した望遠鏡の作成・実験について紹介がなされた。

３．情報交換

時間が限られた中での情報交換であったが、全体を通して下記のような質疑応答が行われた。

Q：子供を如何に集めるかに苦労するが、何かアイデアはあるか。

A：市を通して地元情報誌に募集を掲載したり、小学校を通してお願いしたりしているが（学校によっては教育委員会を通してほしいと言われることもある）、むしろ毎回盛況である。
日立技術士会の理科教室（リタイヤーした人が中心に指導）は、最初から教育委員会と連携して活動しおり効果が高い。

Q：北関東地区についての活動状況は如何か。

A：北関東地区は、比較的技術士の数が多い JAEA や日立の技術士会があることから、毎年新年会を兼ねた交流会や夏の交流会を開いている。参加者は、東京からの参加者もいるし、東海村に原子力工学施設がある関係で、大学の先生方の参加もある。この中で見学会も実施しており、今年の新年交流会は JAEA の那珂研究所（核融合）を見学し好評であった。

以上